



川系男子の『川と人』めぐり No. 30～九州川のワークショップ～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしようがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

♪さ霧消ゆる湊江の 船に白し朝の霜
ただ水鳥の声はして いまだ覚めず岸の家

(文部省唱歌『冬景色』 作詞・作曲：不詳)



図1 九州川のワークショップ引き継ぎフラッグ

1. 11月の川と人めぐり

11月後半になり、九州の紅葉の色づきもピークを迎え、もうすぐ冬支度というところまで秋は深まっていた。11月はなにかと外に出ることが多い月だった。2014年11月22日～23日には遠賀堀川、11月23日～25日までは東彼杵町で研究室のプロジェクトに参加し、その流れもあり鹿児島へ。

2014年11月29日～30日にかけて鹿児島県薩摩川内市で第14回九州「川」のワークショップ in 川内川が開催された。今月は川めぐりが多い月だったが、このワークショップの開催報告をせずにはいられないので、『川と人』めぐりの人の部分を中心に書いてみたい。

表1 九州川のワークショップの歴代開催地
(資料提供：九州地方整備局)

平成13年度	第1回	福岡県久留米市	筑後川
平成14年度	第2回	佐賀県佐賀市	
平成15年度	第3回	宮崎県宮崎市	大淀川
平成16年度	第4回	熊本県熊本市	白川、緑川
平成17年度	第5回	福岡県直方市	遠賀川
平成18年度	第6回	鹿児島県薩摩川内市	川内川
平成19年度	第7回	大分県別府市	
平成20年度	第8回	長崎県波佐見市	
平成21年度	第9回	佐賀県佐賀市	
平成22年度	第10回	宮崎県延岡市	五ヶ瀬川
平成23年度	第11回	熊本県球磨村	球磨川
平成24年度	第12回	福岡県福岡市	
平成25年度	第13回	宮崎県宮崎市	大淀川
平成26年度	第14回	鹿児島県薩摩川内市	川内川



図2 第14回九州川のワークショップ開会式

2. 8年ぶりの開催地

九州川のワークショップとは、2000年に始まった九州各河川で活動する人が自身の川での活動発表する場で、いわば川の自慢大会である。全国川の日ワークショップが今年で18回目であり、それにやり方を習うかたちで全国のワークショップ開始の4年後から九州独自の開催を行ってきた。このワークショップでは各県持ち回り開催で、九州各県（沖縄を除く）の各河川で行われてきた（表1）。



図3 2006年7月の川内川水害（激甚災害指定）



図4 第6回九州川のワークショップ(2006年)

開催地が決定するとその県の川で活動する団体はホスト役を務め、1年間かけて九州各流域の川仲間を迎える準備をする。開催は1泊2日で行われ、毎年300名以上が参加をする。終了すればフラッグ(図1)を次の開催地に渡すという繰り返し。そんなことを14年も続けてきた。このワークショップのすごいのは、活動団体だけでなく、それに関係する国土交通省の各河川事務所、県、市などの行政関係者も数多く参加する。行政の関係者だけでも軽く100名はいるだろう。河川事務所独自の取り組みを発表したり、住民と一緒に発表したり、発表にも涙あり、笑いありのドラマがある。2006年に九州川のワークショップ in 川内川が開催されてから九州各県を一周し、今年再び、川内川開催の運びとなった。

3. 2006年の川内川での川のワークショップ

2006年10月に川内川にて九州川のワークショップが鹿児島県薩摩川内市鹿児島純心女子大学にて開催された。この年は川内川にとっては大きな意味のある年となった。同年の7月18日～22日に1200mmという猛烈な豪雨に見舞われ、川内川流域の各所が被災した(図3)。その直後、九州各地から九州川のワークショップ等で関係のある市民団体や大学生



図5 川内行きのバス車中での発表練習

などが現地に復旧支援に訪問し、泥のかき出し作業などにあたった。私も当時は大学1年生で、遠賀川に帰省していた時だったが、川内川の悲報を聞き、遠賀川水辺館から応援隊として駆け付けたことを覚えている。

それからわずか3か月後、川内川において当初の予定通り、九州川のワークショップが開催された。当時の開催地担当者の方は相当な苦労があったことを察する。このワークショップの2日目の全体討論ではやはりこの夏の水害のことが中心に議論された。会場との議論の末、九州各地の水害に対して復旧を支援するネットワークを構築しようという旨の「川内川宣言」が採択された(図4)。この宣言は今日までの九州の防災ボランティアネットワークの活発な交流に大きな成果を発揮している。当時の私達大学生も2か月後の1月には九州の大学生・若者間のネットワーク、JOCを構築することにもつながった重要なワークショップとなった。

4. 今回の九州川のワークショップ

私が今回の九州川のワークショップへ行くのは3つの理由があった。一つは私の研究報告。九州地方整備局の人に「せっかく全国を巡ったなら、その成果を九州の川の活動に還元してほしい」とのことから。2つ目は発表の支援。現在関わっている長崎県東彼杵町のプロジェクトと一緒に活動している市民団体の人達が初めて九州川のワークショップへ参加をしてみたいとのことで、協働で発表したいとのことから。3つ目は川内川だったから。川内川のワークショップは自身が初めて参加した九州川のワークショップであり、強い思い入れがある。

今回、川内川に向かうにあたっては私のホームグラウンドである、遠賀川水辺館関係の小学生から大人までの多世代30名ほどと乗合いのバスで川内川に向かった。大型バスを借りてこれだけ大勢の団体で参上するのも遠賀川くらいだろう。遠賀川関係の発表は各世代合わせて6団体ほどあり、みんなバスの中で5分以内に発表を終えるよう、何度も練習をしている(図5)。昔、自分達も高校生や大学生のグループの発表を緊張しながら一生懸命練習していた時のことをよく思い出した。



図6 発表の様子



図7 夜のワークショップ（事務局 Facebook より）

5. 自身が発表に関わった主な発表

① 東彼杵清流会（彼杵川）

『アユが戻った！人と人がつながった！これから水辺の生物（アユ）に学びながら繋がろう！』

九州川のワークショップでの発表初参加の東彼杵清流会は、アユが戻ってくるまでの取組み、それを取り巻くつながりづくりについて紹介した。発表は東彼杵清流会の池田さんと国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所の河川環境課長（元諫早出張所長）の中島さん、筑波大白川研の坂本の三者で行った。発表は紙芝居風で演出をし、分かりやすく紹介できたように思う。清流会をはじめ、東彼杵町から3団体が発表し、九州の中でも東彼杵町の川の知名度が少しずつ向上している。

② 筑波大学白川研究室（109水系）

『全国河川市民団体の報告と九州地方の市民団体の活動量の定量的分析』

自身の発表として全国河川市民団体調査の報告を行った。発表では2012年10月と2013年1月に行った九州の20水系の河川市民団体調査の報告を中心にお話しし、他の地方と比べて独自色の強い部分などについて紹介した（図6）。会場で「ここ2～3年の間に自分の地域の川に坂本が来たという人どれくらいいますか？」と聞いてみたところ、会場の半分近くの方が手をあげてくれた。改めて多くの方にお世話になったことを実感し、発表の中で御礼を申し上げた。

③ 古賀河川図書館（全国の川・筑後川）

『河川書の文献について』

古賀河川図書館の古賀邦雄館長による補助発表者を務めた。一問一答方式で坂本から古賀さんへ図書館の概要についての質問、古賀さんから坂本へ図書館を利用した感想についての質問をし、会場に古賀河川図書館のPRを行った。



図8 アピールタイムの様子

6. 夜のワークショップ

九州の川のワークショップは昼間の活動発表も重要だが、夜のワークショップ（交流会）も非常に重要な役割を果たしている。特に川内川では活動のキャッチコピーに「夜も楽しい川内川」という格言があるほどなのでなおさらだ。100名以上の参加者が交流会に参加し、円卓を囲み、酒を酌み交わし、各流域間の交流を深めた（大量の焼酎は川内川流域の地元各酒造の協賛、ソフトドリンクは流域に工場のある大手飲料水会社の協賛）。

最後に全員で、九州では中締めとしてよく使われるダム式万歳（ゆっくりと地球をもちあげるような万歳）を行い記念撮影（図7）。

こういう九州間からみんなが集まってきてざっくばらんに語り合う場が定期的にあることが九州の市民の川活動の元気の源なのかもしれない。

7. アピールタイム

2日目は朝からアピールタイムがあり、1日目の発表では聞けなかった詳細について担当者を訪ねて、直接聞くことができる（図8）。ここで参加者互いが情報交換を深めることができる。実際に東彼杵清流会の池田さんは「さっき、国交省の人からいいアイデアをもらったから帰ったら早速改良してみよう」など成果があったようだ。私の隣のブースでアピールを行っていた、大淀川の活き活き河童の会の大西さんは墨絵でイラストを書く名人であり、アユもどきや河童などを格言つきで滑稽に描いている。私も



図9 大淀川の大西さんによるイラスト

一枚、私になぞらえて遠賀川の若鮭を描いてくださり、イラストをいただいた（図9）。今回のワークショップの交流が生んだうれしい副産物だ。

8. 全体討論会

全体討論会では川内川宣言から8年、頑張ろう川内川をスローガンに頑張ってきた川内川流域の取組が紹介された。その中でも近年は川内川独自の水防災教育のプログラムの開発に川内川河川事務所などが中心になり取り組んでいることが紹介され、今後、九州各地でもこういう防災教育が普及していくことが望ましいという意見が各流域の人からコメントがあった。大水害から8年、激特事業も終了し、ハード面の復興は終わった。それに追従するかたちでソフト面の防災対策も着実に進んでいる。川内川は8年前の水害から学び、水害への備えを着実に進めている。もはや頑張ろう川内川ではなく、頑張った川内川というほうがふさわしいスローガンだろう。



図10 開催地の引き継ぎ

9. 表彰

全プログラムが終了し、表彰式。川のワークショップでは各団体が「知恵」「勇気」「希望」「元気」を与えてくれたことに対し全員に表彰状を授与している。私も「九州の川仲間はすごかったで賞」という賞をいただいた。また、思わぬことだった選好投票で、白川研究室の発表が優秀賞（準グランプリ）を頂くこととなった。大変名誉なものとして有難く頂きたい（グランプリは延岡工業高等専門学校）。

10. 閉会式・次回開催地決定

閉会式では主催者を代表して川内川流域連携ネットワーク代表の中村周二さんをご挨拶された。川内川水害のボランティアの際に泊めて頂いて以来ずっとお世話になっている。30～40団体の参加を想定していたそうだが、53団体からの発表申込があり、申込数を削るかどうかが躊躇したそうだが、せっかく多くの方が来て下さるのだからと全てご招待したそう。運営関係者の懐の深さに感謝したい。

最後に今回開催地の川内川から次回開催地の長崎県の川仲間にWSフラッグの引き継ぎ式が行われた（図10）。次回開催地を代表して、長崎よか川交流会代表の兵働馨さんが挨拶された。長崎もいよいよ2巡目を迎える。今回久々に九州川のワークショップに参加したが、大変有意義な会となった。お世話になった川内川流域連携ネットワークをはじめとする関係各位に感謝申し上げる。

※来年度のワークショップは2015年11月14日（土）～15日（日）に長崎県諫早市の本明川にて開催されます。

【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢めている。

筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りとは冬の川で泳ぐこと。